

「土砂災害について考える」

宮城県 名取市立第二中学校 2年 はしうら 史郁
橋浦 史郁

この夏は、日本各地で集中豪雨に見舞われ、テレビや新聞等で土砂災害に関する報道を見なかった日は全くなかったほどです。

7月28日、山口県萩市では、午前11時までの1時間に100ミリ超の猛烈な雨が降り、生命の危険を感じるほどだったそうです。8月9日には、岩手県雫石町で、1時間になんと77.5ミリの雨を観測しました。いずれの地域でも、同地的な豪雨が観測された結果、山が突然崩れ、跡形もなく木々がなぎ倒され、濁流にのみ込まれる家屋が出るなど大きな傷跡が残りました。この災害で亡くなった人のことを思うととても胸が痛みます。

山は私たちの生活に「うるおい」や、「緑」「恵み」といったものを与えてくれます。そんな自然が人間に牙を向いた瞬間、恐るべき土砂災害となって私たちを苦しめるのです。

土砂災害の種類として、土石流や地すべり、がけ崩れ等がありますが、どうしてそのようなことになってしまうのか、この機会に調べてみました。

土砂崩れには大きく分けて、表面の崩壊と深層の前壊の二つの構造があり、豪雨で土の中にしみこめないほどの雨が降った時、雨水は土や石と一緒に流れます。浸食された溝はだんだん大きくなり、その結果、被害をもたらすのです。私は、最近の日本は、林業に従事する作業者が減っている為に、山林の手入れが行き届かず、山が荒れ放題になってしまった結果、土砂災害を食い止める事ができなくなってしまったのではないかと考えます。その他にも、温暖化現象により、異常気象をもたらす集中的に降る雨を山林の土がさばききれなくなってしまっているのだと思います。長時間降水量が多ければ、木が根を張り山林を形成していても、岩盤と土の境目の結びつきはどうしても緩まり、土ごと滑り落ちてしまうのです。何もかも跡形もなくなってしまうことを「根こそぎ」と言いますがこの言葉の語源になっているのかもしれない。

私は、自然とは、まず個人があって、家族があり、更に家族が集まって街となり、国となり、その先に自然があるのだと、東日本大震災の前までは思っていました。しかし、災害に実際に遭い、考えが逆になりました。自然という大きな器がまずあって、人間が居てそして私たちの個人があるのです。人間はどんなにハイテクを駆使しても、自然の掌の中で生きている存在であることを忘れてはなりません。そんなことを津波によって跡形もなくなった街を見つめながら思ったものでした。人間は、自然の前には「無力」でしかないのです。災害をもたらす異常気象やらの原因は、きっと人間にあるのだと思います。でも、無力でありながらも、「はい、そうですか。」と簡単にあきらめず、次世代への教訓として伝え、活かしていかなければならないとも私は思うのです。

8月30日、気象庁が「特別警報」の運用を始めました。気象業務法を改正して導入されたことにより、都道府県から市町村への連絡や市町村による住民周知が義務化されることになったのです。局地的な大雨の予想は難しく、特別警報の発表がなくとも災害が起こりうる恐れもあるので、自然は本当にやっかいだと言わざるを得ません。特別警報とは、水害や土砂災害から一刻も早く行動をとり、安全な場所へと行動をとるべき非常事態である警報です。

そして国や県、自治体は、土砂災害危険箇所を発表しています。土砂災害から身を守るために、自分が住んでいる所は大丈夫なのか知っておく必要があります。もしも、自分の住所が危険箇所の範囲にあった

としたら、普段から山の様子をチェックして、豪雨時には気象情報に注意しなければならないと思います。そして面倒くさいと思わず、自分の命を守ることを肝に銘じておくよう、家族や近所の人と話をしておくべきだと強く思います。

日頃から浸水や土砂災害の起こりうる場所を把握し、避難場所やルートを確認しておくことが大事です。「備えあれば憂いなし」とは、どんな自然災害にも当てはまる事です。多くの人の命や財産が奪われるような悲しい思いをしないためにも、私たちは防災に尽くし、努めていかなければなりません。

大事な自分の命や家族の命を守る為に、逃げねばならぬときには、逃げる勇気を持ちましょう。家財は失ってもまた取り戻せます。自然の圧倒的な力と共存できる努力は今後もしていかなければならないと思います。そのためにも、いざという時のために、家族と話し合いをし、注意を払っていく行動を始めたいものです。